

## カルチュ・ラタンの熱気

### — 哲学者たちの若き日 —

永 治 日出雄

十歳で故郷のジュネーブを離れたジャン・ジャック・ルソーが、ながい放浪と歴歴のあと、パリで旅装を解いたのは、1742年の夏である。汚ない小路の汚ない旅館の汚ない部屋に泊った、と『告白』第七巻に記されている。しかし、彼が滞在したホテル・サン・カンタンは、文人墨客が好んで利用する宿で、ディドロと友情を結ぶ機縁ともなった。こうしてルソーは啓蒙運動を推進する哲学者たちと交わり、ディドロ・ダランベール編『百科全書』の執筆にも参加する。また彼はこの旅館で働くテレーズ・ルヴァスールに近ずき、無学ではあるが、心根の優しい彼女を生涯の伴侶とした。

古い地図で確かめると、『告白』に記されたコルドリエ通りは、宏壮なソルボンヌの堂宇（現在はパリ第四大学）の南端に接する。緩やかな坂道にいまは郵便局と製本屋が並び、ホテル・サン・カンタンもその付近に位置したと思われる。静かでくすんだ裏通りではあるが、さすがにカルチュ・ラタンらしく、小さな郵便局にはいつも若人や留学者が溢れ、世界の各地に便りを送ったり、電話をかける混雑が絶えない。

ヨーロッパではじめて筆者が宿泊した旅館も、セーヌ左岸の質素なホテルである。ド・ゴール空港から直行すると、フロントに不愛想な老人がいるだけで、エレベーターもなく、案内もしない。曲りくねる階段を昇り、六階までスーツケースを運ぶ。狭苦しい個室にはベッドと椅子が置かれていたが、腰を据えようとするや、椅子の脚は折れ、横に傾いた。それは忘れえぬ白夜の第一日で、深更まで賑わうカルチュ・ラタンの雑踏に驚き、路上でかたく抱擁する男女の影に、私は眼を見張った。

ひとり旅するときこそ、ゆたかに生き、ゆたかに考える、と『告白』でルソーは言う。日頃の習慣や拘束から遠ざかり、異境の暮らしや情景に触れることによって、旅人の心情は横溢し、想念は高く飛翔する。農民の困窮と恐怖を目撃して、ルソーの胸に苛酷な政治への怒りが湧きはじめたのも、パリへの旅の途上である。

セーヌ左岸における青春の謳歌と文化的な熱気は、たちまち筆者を魅了し、新鮮な感興を喚び起した。カルチュ・ラタンが夢みる詩人、貧しい書生、ひたむきな乙女の街であることは、ブッチーニの歌劇「ラ・ボエーム」やバルザックの長編「ゴリオ爺さん」に描かれた時代と変らない。サント・ジュヌヴィエーヴの丘の図書館では、夜遅くまで古文書に取り組む学究の徒に敬服し、婦人解放を訴えるプラカードと『愛の讃歌』の合唱で、サン・ミッシェル広場を埋め尽す青年男女に私は感動した。そしてまた、ディドロが通ったカフェやエルヴェシウスが洗礼を受けた教会を尋ねつつ、これらの哲学者たちが若き日をいかに過したかと考えた。

フランスにおける啓蒙運動の特色は、なによりも思想集団としての幅広さにある。ヴォルテールやケネーなど著名な思想家をはじめ、『百科全書』全35巻に寄稿した知識人だけでも200人に及ぶと推定される。こうした啓蒙運動の伸長が、パリという土壌に深く根ざすことを、徐々に私は理解するようになった。ディドロを中核とする思想集団については、『百科全書』の企画が始まる1745年頃から説かれることが多い。しかし、哲学者たちが結集する萌芽は、その十年あるいは数十年前に存すると筆者は判断する。

1735年の時点で若き哲学者たちを捉えてみよう。ルソーはアルプスの麓シャンベリーで、刊行されたばかりのヴォルテール著『哲学書簡』を読み、学問への眼を開かれる。魅力的なワランス夫人の愛に包まれて、まもなくルソーは本格的な自己教育に専念する。カルチェ・ラタンでは故郷を出奔してきたディドロが、ボヘミア的な生活を続ける。捨て子ダランベールはガラス職人に育てられ、セーヌ河畔のクアトル・ナシオン学院で数学の天分を認められる。卓越した名医の息子エルヴェシウスは、ソルボンヌと道ひとつ隔てたルイ・グラン学院に進むが、専制的な教師と中世的な学風に反抗する。なお写真派の画家シャルダンも、セーヌ左岸で生まれ、先輩の工房で修業を積む。絶対王政を軽妙に諷刺したモンテスキューとともに、早熟なヴォルテールは戯曲と小説と哲学書を世に送り、すでに脚光を浴びていた。

やがてカルチェ・ラタンへはシャンベリからルソーが、グルノーブルからコンディヤックが、ライデンからジョークールが移ってくる。『百科全書』の事業が始まり、ドイツ人のグリムとドルバックも参加する。これら哲学者たちはジェフラン夫人やレスピナス嬢の文芸サロンに集まり、たがいに啓発し、友誼を深めた。豊かな国際性は、啓蒙運動の規模をさらに広げる。パリの文芸サロンでは、アメリカの英雄フランクリンとジェファーソンが顔をみせ、イギリスの思想家ヒュームとスミスが招かれ、天才的な音楽家のモーツァルトも天才的な色事師のカザノヴァも歓迎された。

ヴォルテールとエルヴェシウスが在学し、ディドロも聴講に赴いたルイ・グラン学院は、今日でも中等教育きっての超一流校である。この学院の400年にわたる校史を調べると、カルチェ・

ラタンが、世界の若人をいかに惹きつけたかが理解できる。ルイ・ル・グラン学院でははやくも十七世紀に、イギリス、スペイン、イタリアの青年はもとより、ポーランド、ロシア、カナダ、西インド諸島、さらにはトルコ、中国からの留学生が勉学に励んだ。

パリにおける国際交流と民族の混合は、転変する世界を反映し、現在はさらに新しい様相を呈する。セーヌ左岸の盛り場や夕暮の地下鉄の構内で、群れをなすアフリカの労働者にいつも私は圧倒された。イラン革命を鼓舞する落書きも目立ち、アフガニスタン進駐に関するピラも飛ぶ。強烈な民族色を発揮するセネガル演劇団がオデオン座で好評を博し、ワイダー監督の映画をみるために、長蛇の列が続いていた。

人間は環境と教育の産物である、という主張は啓蒙運動の主要な原理に教えられる。しかし、哲学者たち自身の生いたちや若き日について、知られている事柄は意外にすくない。同時代の人達や後世の研究者が、子どもとしての生活や青年の問題に、関心が薄いからとも思われる。ヴォルテールやエルヴェシウスやダランベールの生涯を復元するためには、直接的な記録に頼るだけでなく、彼らを取巻く様々な人間関係と社会環境を認識することが大切であろう。この容易ならぬ仕事においては、膨大な資料を検討するとともに、ヨーロッパで実地検証を重ねることも必要である。

啓蒙運動が80年にわたり、数百の人物が関与した悠々たる大河であることを忘れてはならない。近代への思想的準備につとめた哲学者たちの人間形成について、焦らずにすこしずつ調べていこう。

(教育学教室・教員)



ディドロの住いがあったサン・ジェルマル大通り149番地  
隣りはアポリネルやマルロオが通った文芸カフェ・リップ

# 学園だより

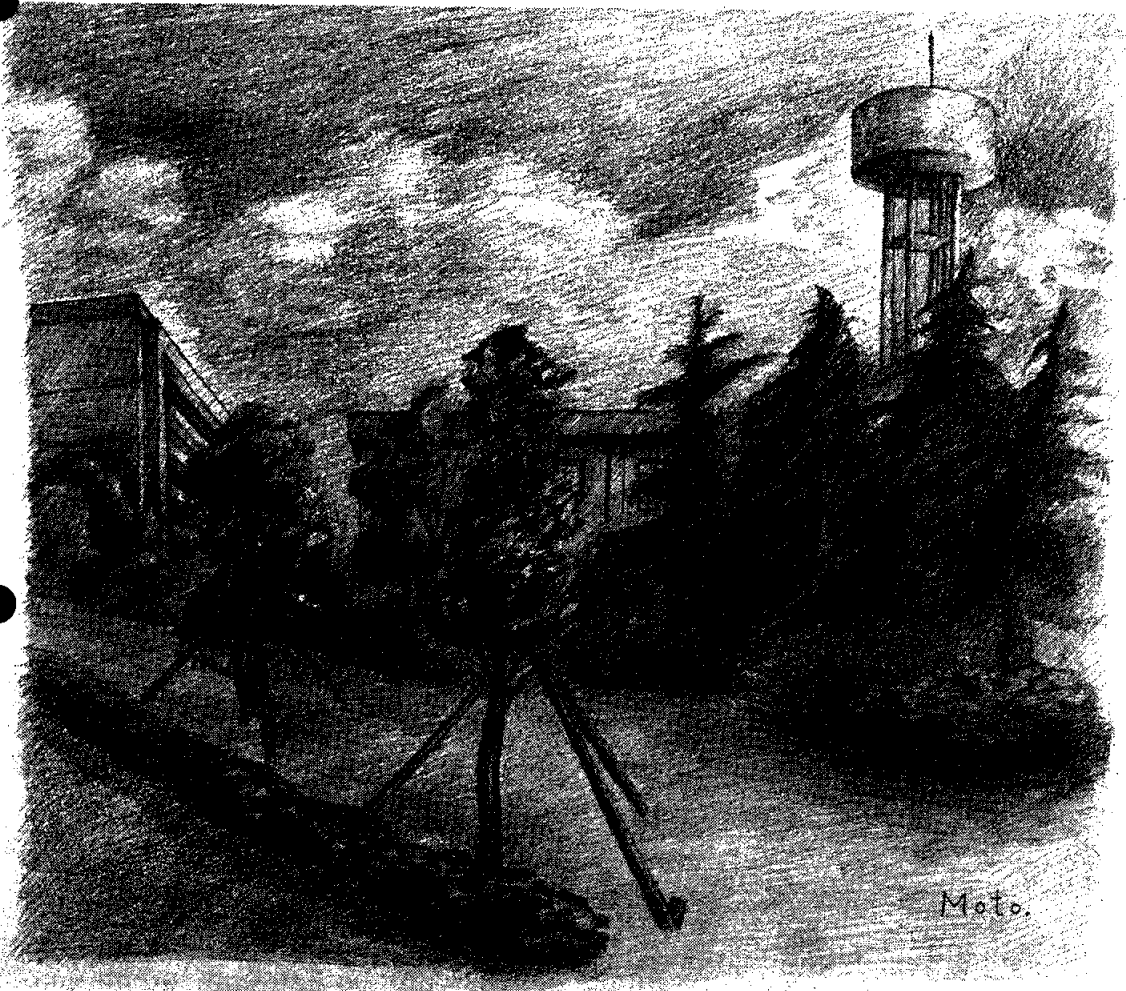
第35号

昭和57年9月10日発行

愛知教育大学  
学園だより編集委員会

特集

## 実りある大学生活



「バス停より」美術教室3年生 浅野 元男